

これはむしろ、われわれがわれわれの<sup>ある</sup>ことを、「片時も同一を保たないもの」というつまりはドクサ的な把握の場に埋没させてしまうか、或いは、「つねに同一性においてあり同一のあり方を保つもの」という存在そのものとの<sup>かかわり</sup>の場でそれを把えることが出来るかという、その根源的な二者択一を示すものとして、つねにあったといえよう。さてこのようなプラトンの思索が、まさにアイデアの「離在」と「分有」という、いわば存在自体のもつアレーティアの構造をめぐって、以後いかなる哲学の問題を生みだしたかについては、今はそれを語る時間的余裕はすではない。ただ以上の考察にもしも大きな誤りがないとすれば、プラトンのアイデア論の意味とは、存在とか真理という問題をわれわれが問わねばならない必然性をもつ場面の構造を、まさに *φιλοσοφία* 自身の問いとして問うことにあったといえるのである。そしてそのかぎりプラトンの哲学というのは、単に或る時代の思索のひとつの記念碑として終るものでは決してなかったのである。

## 提題

## アウグスティヌスのプラトニズム

加藤 信朗

中世のプラトニズムの問題は何らかの意味で「プラトンの」な中世哲学の諸類型の呈示と源泉の探索で終ってはならない。それらがいかなる意味で「プラトンの」であるのか、つまり、いかなる意味で「プラトンの」哲学とかかわるのが問われねばならない。これは「プラトニズムとは何か」を問うことであり、また、「プラトンとは何か」を問うことである。アウグスティヌスのプラトニズムについてもプロティノスの影響が語られ、ポルピュリオスの影響が語られる。しかし、これら源泉への探索に先んじて、これらの仲介者を通じてアウグスティヌスが学習し、みずからの骨肉としたプラトン哲学が何であったかの問がある。このようなものがアウグスティヌスの内にあったとする時、アウグスティヌスの主要著作が *actualitas* をもった中世世界に、プラトンの哲学もまた何らかの *actualitas* をもったと見なされなければならないだろう。おもうに、中世哲学の中でもっとも重要なプラトニズムの問題

は、この正統キリスト教思索の骨身に沈着融合したプラトニズムの問題なのである。

このようなものとして、私は *veritas* をめぐるアウグスティヌスの思索を取上げる。おもうに、*quaestio veritatis* は彼の終生の課題であったが、*veritas* は *intellectus fidei* という彼の哲学の方法においてその *finis* として *intellectus* の面を代表する語であった。そして、この語をめぐる思索のうちに彼のプラトニズムもまた聚約されていると思うからである。

『神国論』第8巻Ⅳは、神のうちに存在と認識と行為の原理 (*causa subsistendi, ratio intellegendi, ordo vivendi*) が見出されるとする説をプラトンの説として述べている。これをアウグスティヌスがどのような源泉から学んだとするにせよ、これは他ならぬアウグスティヌスのプラトン解釈である。そして、それはまたそのままアウグスティヌスの哲学でもあった。ここにはプラトン哲学の勝義における受容と変貌がある。この受容と変貌の本質相を見究めることに「アウグスティヌスのプラトニズム」解明の鍵がある。私は、神が *veritas* として捉えられることによって、アウグスティヌスにおいて、神がこれら三者の原理として把握されたと考える。そして、この *veritas* をめぐる独異な思索によって（三一的思考に終極する）アウグスティヌス固有のプラトニズムが結晶しえたと考える。

I 認識の原理としての *veritas*。アウグスティヌスの認識論は「照明説」として知られる。しかし、これまでの解釈は大方 *verum* と *veritas* を共に「真理」、*truth*, *vérité* と訳し、両者の間にある認識論上の根本差別を十分に明確にしえなかった点で、*veritas* をめぐるアウグスティヌスの思索の根本動向を捉え損じた憾みがある（この点については、初期の著作では、円熟期の著作におけるような一貫した用法が必ずしも見られないという事実がある。しかし、だからといって初期の著作を解釈の規準とするのは誤まりである。むしろ、初期の著作にも後期の著作の思考の萌芽は見られるのだから、そこには徐々に熟成してゆく思索の展開を見るのが妥当である）。*veritas* (眞) は、何であれ、「真である (*verum est*)」と言われるかぎりのものがそれによって「真である」ところの根拠である (cf. *Solil.* XV 27 *si quid verum est, veritate utique verum est.*)。 *veritas* と *verum* の間には原因づけるものと原因づけられるものとの間の関係がある。だが、この原因そのものの直観は原因づけられるものの内に充足的に与えられているわけではない。ここから、「照明 (*illu-*

minatio)」と言っても、そこには次元を異にする三つの事象のありうることを弁別しなければならぬ。(イ) 精神が veritas に照明されて、verum を verum として認知すること。ここでは、verum は見られるが、veritas そのものは見られない。理性的、反省的な真理認識の次元がそこにある。intus veritatem consulere, lucem consulere とか、in luce veritatis [vera] contueri, vera intueri (cf. *Mag.* XI-XII) という表現はこれを言う。初期著作の論述の力点はそこにある。(ロ) 精神を照明して verum を認知させている veritas そのものが観られること。このためには魂の視向の転回 (conversio) を要する。観られるのは vera ではなく、veritas である。『告白録』第7巻の光の体験の次元がそこにある。(ハ) 人間の全体が神の光に照らさ一つの「<sup>あか</sup>明り (lucerna)」となること。Vos estis lux mundi (*Matth.* V 14) と言われて、る場合の lux はこの lucerna の意味である。それは単なる理性認識の次元のことではなく、聖化の次元、神秘の次元のことである。(ロ) は合理の終極、神秘の端初として、(イ) と (ハ) を結ぶ。このように「照明」に三種の次元を弁別する時、照明説にはいかなる自家撞着も含まれず、かえって、それこそ veritas に向うアウグスティヌスの思索の道を一つの統一<sup>た</sup>らしめる構造原理であることが明らかとなる。

このように理解された veritas は verum と falsum の弁別の原理である。それゆえ、それは verum と falsum があるあらゆるところに働く。verum を falsum から弁別してゆく精神の道行において、この道行を導く veritas そのものへと振りかえる時、精神は光に刺し貫かれる。

これはプラトン対話篇に含まれるソクラテスのモメントである。知慧 (σοφία) の否定者であったソクラテスも ἀλήθεια を語り、ἀλήθεια につくという点でははっきりと肯定の態度を示す (cf. *Ap.* 17B, 24A; *Gorg.* 472B, 479E, 486E, 526D)。いわゆる「イデア論」もひとが ἀλήθεια につくための魂の視向の転回 (μεταστροφή-*Resp.* 518 D, 525A, 525C, 526E, 532B) に定位されて始めて意味をもつであろう。「洞窟の比喩」はこれを語る。「洞窟の比喩」はアウグスティヌスの愛好した locus platonicus であったろう。そして、彼の veritas 論はその独異な転位として成立しているのである。

II 存在の原理としての veritas。「存在する (esse)」とは「真なるものである (verum

esse)」ということである (omnia vera sunt, in quantum sunt.—*Conf.* VII, XV, 21)。ところで、verum は veritas によって verum である。それゆえ、veritas は存在の原理である。——これはアウグスティヌスの存在論の根本原理である。ここで言われる真とは命題の真ではなく、存在の真である。それゆえ、そこでは「存在する」ということをわれわれがどのように捉えるかという存在把握の方式そのものが問われてくる。そして、そのようにわれわれの存在把握の方式そのものを問うという仕方では存在にかかわる存在探究の方式はプラトンのそれであったのである。(イ) 事物の名前に対応するものとして事物の存在が措定され、存在の問題をこの意味での事物の存在と非存在の問題に局限する時、esse は essentia を問われぬままに、したがって、その真を問われぬままに処理されるものとなる。存在の認知は名前によって精神のうちに (in mente) 惹き起される表象に対応する事物の存在の検証だけの問題となる。唯名論への道がそこにある。(ロ) アウグスティヌスにおける存在の理解はこれとは異なる。esse は verum esse としてだけ把握される。そして、verum はまず disciplina, ars によって確かめられるものだった。ars によって確かめられる verum とは、たとえば、ひとが grammatica によって文を語り、文を書くことによって知られてくる verum であり、そのようなものとして知られてくる存在者 (quod est) である。それは名前に応ずる表象の対応者として精神の外に措定されるものではなく、事物にかかわるわれわれの関わり方を規制する一つの regula の認識によって生れる「存在するもの」の把握なのである。このように把握される quod est は incommutabile である。だが、それは mutabile なものをも、それが regula になうかぎり、そのようなものとして存在させている<sup>\*\*\*</sup> 定りである。mutabile が存在するなら、それを存在させている原因 (causa subsistendi) である。このような esse は bonum esse である。esse はここで esse debere を含むものとしての esse、存在の根拠を含むものとしての esse である。veritas とはこのような ars により捉えられるものとしての verum を verum として存在させる根拠を言う。それは「あるべし (debet esse)」を定める規範 (regula) そのものを言う。qui est est (*Conf.* XIII, XXXI 46) とはこのようなものを言うと考えられる。それは事物を形成し、存在させている根拠としての forma である。

Ⅲ 行為の原理としての veritas。人間の存在、したがってまた、自己の存在が認識

されるのも「二本足の直立するもの」という表象の類似性によってではなく、われわれ自身が生きていること (se vivere) を知り、さらに「ただしく生きること (iuste vivere)」の regula によって生きていることを知ることによってである。ここからして、veritas が ordo vivendi である所以も明らかである。それはわれわれの存在が本来そのようにあるべく造られている regula, leges aeternae の根拠であり、回復されるべき本然の性 (natura), 還帰すべき終極を告示することによって、行為を總体的に規制するものだからである。

さて、このような存在の諒解、また、存在の根拠の諒解の道はまさしくプラトン哲学の道であった。またプラトン哲学の勝義における受容と変貌の過程で生れてくる哲学の道であった。この意味においてアウグスティヌスはプラトン哲学の正統の後継であったと言いうるであろう。

問題1 アウグスティヌスにおいて veritas は時間の根拠を含み、個物の存在をその incipere と desinere において限定する規範として働くと考えられるが、このようなことはプラトン哲学の枠組のどこかに収められうるであろうか。『ピレボス』篇の *τέρατρον γένος* をどのように解釈すべきかが問われてくるであろう。

問題2 アリストテレスの自然学書、形而上学書の流入と共に起った、いわゆる「13世紀革命」がアウグスティヌスの著作に保存されていたプラトンの哲学の良き種を踏み潰すことはなかったのか。われわれはいまアリストテリズムの得失の再検討を迫られているのではなかろうか。

## 提題

## 12世紀のプラトニズム

大谷 啓治

クレルヴォーのベルナルドゥスの弟子サン・ティエリーのギョームは、『コンシュのギョームの誤謬について』の中で、「コンシュのギョームは新しい哲学を提唱する」(P.L., 180, col. 333), 「自然学者、哲学者たる人間が神について自然学的に哲学している」(同 col. 339) と非難の声をあびせている。